

八戸市医師会 季刊

NO. 649

令和 5 年 7 月 20 日

八戸市医師会



巻頭言 羽仁もと子と千葉クラ
～令和時代に何を語る～

巻 頭 言

羽仁もと子と千葉クラ ～令和時代に何を語る～

千葉学園高等学校 校長

岡 本 潤 子

もしも願いが叶うなら「羽仁もと子と千葉クラ、二人の女性と話がしたい！」と即座に答える私。その二人の女性とは、明治9年に八戸に生まれ育った私の曾祖母である千葉クラと、クラの実姉であり明治6年に八戸で生まれ育った羽仁もと子である。旧姓は松岡。二人の生家は長横町6番地。長横町を歩いていると、プレートが掲げられておりその跡がわかる。私の身体には、その二人と同じ血が流れている。そして私と二人との共通点は教育に携わり、「校長」として生きた時間があるということである。千葉クラは明治43年34歳の時「女子の裁縫のみならず精神教育に志し～（中略）寒村僻地の女子若しくは無産階級の女子にも普く教育を施すをもって主眼とす」という熱い思いを抱き、小さな裁縫塾を開き、今年で113年目を迎える千葉学園高等学校を創立した。姉のもと子は、日本人女性初の新聞記者として報知新聞社にて、女性の視点で文章を書き活躍。同僚で7歳年下の羽仁吉一と結婚した後は、二人の思いは「家庭からよい社会をつくる」ために、家庭雑誌『婦人之友（創刊当初は家庭之友）』を創刊。今年で120年目を迎え現存する小さくても精神性は強固な雑誌である。家庭は最小の社会であり「小より大へ」、一つ一つの家庭がよい家庭であるならば社会全体がよくなるとの思いを、雑誌を通して全国へ発信した。その雑誌は実験室でもあり、快適な生活のためには洋服がよいと感じると、型紙から作り方までを掲載し全国へ普及させたり、家事仕事の効率を高めるために工夫された台所を考えたり、割烹着を考案したり、昭和初期にシェアハウスまで提案しており、その特集記事には驚かされる。確かに、来客がそうあるわけでもない一般家庭に接客室は不要であり、集合住宅のどこかに皆で使うことができ

る部屋があったり、高価なピアノも集合住宅のどこかに一台あれば事足りる。そこには「家庭は質素に、社会は豊富に」の思想がある。「経営」者の視点は何も会社経営だけではなく、家庭経営も立派な「経営」であり、家庭人は「経営」者であることの自覚を持ちつつ、社会とつながりながら生活をするの大切さを唱え続けた女性である。その思いは子どもたちの「教育」へとつながり、大正10年に、自由学園を創立した羽仁もと子。姉妹そろって別々の地に学校を作り、両校共に100年を迎えた学校は世界にも他にないのではないかと。

明治の時代に「教育」を志した姉妹。人が成長してゆく過程における「教育」の果たす役割に着目し、単に技能だけではなく、精神性の成長を促すために、羽仁もと子の言葉を借りると「生活即教育」を学校の基盤として、生徒と共に学校を作り上げてきた二人。建学の精神は令和の時代にも生き続けている。もしも願いが叶い、二人と話ができるならば「ねえ、二人のおおばあちゃん、時代によって、教育の姿って変わらなければならないの？」と問うてみたい。生徒たちを取り巻く環境は激変し、生徒が考える前に、行動する前に大人が用意した答えが目の前に提示されていることが多い環境の中で、人として成長することが果たして可能なのか。羽仁もと子著作集を開くと、もと子の声が聞こえてくる。「時代になんか惑わされずに、素人の教育をするんだよ。玄人になったらおしまいだ。進歩する素人だよ。問題が起こったら必ず正直に直面して、その正しい対策を見つけ出すんだ。そしてあんだも一人の生徒であることを忘れてはなんねえよ」と。生涯を通して消えることのなかったかなりきつい八戸弁のもと子の声。